目白大学　健康科学研究
第11号　2018年　41－49

社会的・家庭内役割が大きく変化した脳血管障害者への作業療法に関する文献的研究

小林　幸治
（Koji KOBAYASHI）

【要旨】

《背景》役割変化が中～大の在宅脳血管障害者は現在から今後への展望にも大きな不安を抱いているとされている。しかし、作業療法での役割支援について参考となる資料はあまり見当たらない。今回、社会的・家庭内役割が大きく変化した脳血管障害者への役割支援について言及した作業療法領域の文献的研究を行った。

《方法》医中誌とMEDLINEを使用して文献検索した。内容が本研究の主旨に関連が無いと判断された論文等を除外し、検索できた文献を、脳血管障害者の役割支援に関連した研究と、役割支援に関わった事例研究とに分けて検討した。

《結果》医中誌は34件、MEDLINEは0件で、手検索で英文論文を２件追加した。役割支援に関連する研究では、在宅脳血管障害者の役割が家族の一員、友人、家庭維持者程度に留まっていることが示された。また質的研究から、その役割の主観的状況を理解する資料が得られた。事例研究から、事例たちは生きる上で支えとなっていた役割を喪失し、それに対し作業療法では役割チェックリスト等で事例にとって価値のある役割を明らかにした上で支援が行われていることが明らかとなった。

《考察》今回の結果で示した役割支援の例は、臨床で役割支援に困難さを感じている作業療法士の示唆となると思われた。今後臨床で有用となるように、支援方法の理論化が求められる。

キーワード：作業療法、脳血管障害者、役割支援、文献的研究

はじめに

どのような境遇にある人においても、役割変化は個人に心理社会的に多大な影響を及ぼすとされる[1)]。そのため、作業療法の中で対象者の役割再獲得への支援は重要なテーマであり続けてきた。社会学における役割理論によると、人は役割を演じることによって社会を構成・変容させうる。つまり、人は役割行動（役割に相応しい行動）を取ることで社会に所属し、社会に貢献し社会を変容させることに関与できる。それに対し、役割変化とは、役割行動が取れなくなり、一般に、社会への所属や貢献に関わることのできない受け身的な役割である、例えば患者、被介護者等になってしまうことである。そして、役割支援とは、再び役割行動が取れるようになり、役割を演じ、社会で有用な存在としての自己への意識を回復させることを指すと言える。

脳血管障害者は身体領域に従事する作業療法士（以下、OT）の主要な対象であるが、筆者は多くの脳血管障害者に臨床場面で出会い、この人たちの役割支援に取り組んできた。そして、対象者の目線でこの課題に関わることの難しさを痛感してきた。筆者らは先行研究で「脳血管障害者は社会的・家庭内役割の変化の程度によって、主観的回復感の回復プロセスに違いがあるか」について質的研究を用いて検討した[2)]。この主観的回復感の回復とは、筆者らは、これまで行ってきた脳血管障害者への作業療法についての研究から「病前との（自己の）連続性の回復」であると捉えて

こばやしこうじ：目白大学保健医療学部作業療法学科

いる[3]。この先行研究から、役割変化の程度が中（病前の役割を一部分のみ実施するようになった）・大（実施が困難になった）レベルの在宅脳血管障害者は、入院中の不全感もより強かったことが明らかとなったが、さらに、現在から今後への展望にも強い不安感を抱いていると推察された[2]。この内容を学会発表した際、ある若手のOTより、こうした患者への作業療法での関わりに非常に難渋しており、示唆が欲しいと相談を受けた。しかしながら、作業療法での役割支援について参考となる資料等はあまり見当たらない。そこで、今回、社会的・家庭内役割が大きく変化した脳血管障害者への有用な作業療法の特徴や課題を検討するため、脳血管障害者への役割支援について言及した作業療法領域の文献的研究を行うこととした。

Ⅰ．目　的

脳血管障害者への役割支援に言及した作業療法領域の文献的研究を行うことで、社会的・家庭内役割が著しく変化した脳血管障害者への作業療法の実践に関する示唆を得ることとする。この結果は、筆者が研究・開発を進めている「脳血管障害者への心理社会的支援メソッド」のための参考資料とする。

Ⅱ．方　法

１．文献検索

文献検索システム医学中央雑誌（医中誌）およびMEDLINEを使用して文献検索を行った。検索対象を「原著論文」とし検索対象期間は特に設定しなかった。検索語は医中誌では「脳血管障害者」「作業療法」「役割」、MEDLINEでは ‘stroke’ ‘occupational therapy’ ‘role’ をそれぞれ用いた。検索された結果から、院内紀要論文、地方の作業療法雑誌は除外し、内容が本研究の主旨に関連の無いと判断した論文も除外した。一方、手検索により、本研究の主旨に該当すると判断した文献を追加した。

２．レビューの方法

検索された文献を大きく２種類に分けた。一方は「脳血管障害者の役割支援に関連する研究論文」とし、他方は「役割支援に関わった事例研究」とした。前者については、役割支援に関連する要点を抜き出して検討した。後者については、主な支援内容、役割支援の方法に関する要点を抜き出して検討した。

なお、文献検索は2013年10月12日および10月13日に一度実施した。その後、2017年10月４日と５日に再度実施した。後者の検索については、初回の検索結果を参考にしながらも、再度やり直し、新たな結果として文献を抽出した。

Ⅲ．結　果

１．検索結果

医中誌・MEDLINEの各々を使った上記の検索語での検索結果に対し、総説や解説、院内紀要、地方作業療法雑誌を除外し、また研究主旨に関連のない論文を除外したところ、医中誌は34件、MEDLINEでは０件が検出された。また、手検索で英文文献を２件検索した。特に英文文献は、検索語で検索された論文はほとんどが専門職としての作業療法士の役割について言及されたものであった。

これら邦文文献34件のうち、役割支援に関連する研究論文は10件、事例研究が24件であった。手検索された英文論文は２件とも役割支援に関連する研究論文であった。

２．脳血管障害者の役割支援に関連した研究

脳血管障害者の役割支援に関連した研究は、邦文文献10件、英文文献２件だった。これらより、役割支援に関連する要点を以下に抜き出して示す。

１）．在宅脳卒中患者の生活状況と介護者の及ぼす役割

森永[4] は、介護者・患者の生活における満足度は、ADL自立度よりも、交流や家庭での役割の有無に影響されている可能性を示唆した。在宅脳卒中患者75名の役割は、電話応対、留守番などに限られ、積極的役割は乏しかった。

２）．地域生活を送っている高齢障害者の作業役割

笹田[5] は、脳血管障害者を主とする作業療法を受けている高齢障害者47人中約６割が役割喪失感ありと回答したことを示した。また９割の人が身体の回復と役割は関係していると回答した。そして、作業療法で新しい役割獲得を希望している人の割合は８割と多かった。

3）．脳卒中患者と介護者のQOL

和才ら[6]によると、家庭復帰した脳卒中片マヒ者32名とその介護者ともに「家庭生活」の満足度は比較的高いが、介護者の「社会生活」「自己啓発」の満足度は低かった。また、患者の「勤労生活」の満足度は非常に低く、やりがいのある活動の場所や情報提供が必要とされた。

4）．脳血管障害者と生活を共にする家族の思い

山根ら[7]によると、回復期リハ病棟から退院した脳血管障害者の妻は、退院後から半年の間に、「本人との生活の中で模索し発展させた役割」「本人の生活と自分の生活との折り合い」「感じている負担」の3つの介護経験をしていた。これらを家族の適応状況を捉える指標として利用できるのではないかとしている。

5）．ADLが自立している在宅脳卒中後遺症者の自信とその関連要因

鈴木ら[8]は、脳卒中男性患者の自信は健常成人男性と比較し有意に低下しており、自信を維持・促進するのにADL自立だけでなく作業バランス（趣味・楽しみ・役割）が大きな要因であることが明らかとなった。そこで、作業療法ではこの作業バランスに働きかけ、習慣化を図ることが重要だとした。

6）．地域生活する男性脳卒中障害高齢者の作業適応と人間関係の変容プロセス

西野ら[9]は、通所施設を利用している男性脳血管障害者のうち、再び「満足できる人生の実践者となるプロセス」を辿る場合には〈生活を自分のものにする戦略〉として「脳卒中になったことへの潔いあきらめと今後の展望」を持った上で〈作業を継続する戦略〉として「家族への配慮」とともに「自分の事は自分でする戦略」と「生活を楽しむ戦略」を用いていることを示した。

7）．回復期リハ病棟を退院した在宅脳卒中後遺症者の役割の実態と入院中の作業療法での役割支援の関係

緑川ら[10]によると、入院中の作業療法では勤労者・家庭維持者・趣味人・家族の一員への役割支援が多かったとされた。OTは生活内でより活動性を伴う役割を優先的に選択し、その役割が要求する具体的な課題や活動といった作業的側面を支援している傾向があった。

8）．脳卒中者は病前との連続性を回復する際に作業療法をどのように意味づけているか

小林ら[3]によると、脳血管障害者の主観的回復感の回復に寄与するため、OTは脳卒中者を「資本となる身体」「支える家族や知人」「仕事に代わる作業参加」「自己役割をやり遂げる意志」の4つの視点から見ることが有用であるとした。このうち「仕事に代わる作業参加」は、支援者が対象者にリハの目標を要求したり、作業療法の中での作業達成で自信を深めたりすることであった。

9）．患者が自身の生活に目を向けるきっかけ

岩上ら[11]は、回復期リハ病棟の入院を経験した脳血管障害者3名が、生活に目を向けるきっかけとなったのは「病前生活での自身の役割の明確な再認識の機会」と「作業療法場面での家事活動」があり、きっかけを導く背景には「病前の具体的な役割の存在」「前向きな考え方」「病気の体験を今後の生活にプラスに活かす姿勢」があったとした。

10）．回復期リハ病棟を退院した在宅脳卒中後遺症者の役割と活動・心理状態の関係

緑川ら[12]は、回復期リハ病棟を退院した脳卒中後遺症者50名を調査し、役割数・役割行動時間は日常生活活動と手段的日常生活活動の能力が高いほど多いことを示した。また、役割数や役割行動時間が増すことで、身体機能が低くても対象者の心理面や幸福感の向上、作業に関する有能性や価値の維持向上に繋がるとした。

11）．脳卒中者と脳卒中なし高齢者における生活時間・役割参加

McKenna Kら[13]によると、脳卒中と健常者の高齢者で、両者ともにより多くの役割を持つ事が生活の満足度に繋がっていた。しかし脳卒中者の側は、有意に役割保持数が少なく、家族の一員、友人、家庭維持者くらいであった。

12）．患者の視点から見た脳卒中が役割や自己に与える影響

Satink Tら[14]は、脳卒中後遺症者に関連した33の文献について意味分析をした。患者の視点から見た脳卒中が役割や自己に与える影響について、「連続性が途切れた状態に対してもがく」「役割を再獲得する―続けるか新たに得るか」「役割と自己のマネジメントに文脈が影響」の4つのテーマが得られたとした。

3．事例研究に見る役割支援

役割支援に関わっていた事例研究は、邦文文献24件であった。これらの一覧を表1に示す。対象の事例が喪失した役割、OTが支援した役割、OTが行った

表1　役割支援に関わっていた事例研究

	著者名	論文名	対象者	雑誌名	発刊
1	杉本育子・村木敏明・他	地域における生活関連動作に密着した脳卒中片麻痺女性に対するダイナミックアプローチ	58歳女性、左片麻痺	作業療法 11:58-62	1992
2	野藤弘幸・山田孝	協業により作業役割を獲得した一例	70代女性、脳出血	作業行動研究 5:25-31	2001
3	表みどり・山田孝	長期にわたり病院・施設での生活に適応してきた片麻痺女性の叙述	88歳10年前脳出血右片麻痺	作業行動研究 7:40-46	2003
4	川又寛徳・山田孝	一枚の絵はがきがもたらした変化から見る在宅生活支援	77歳女性、脳梗塞右片麻痺	作業行動研究 8:24-29	2004
5	武山雅代・山田孝・他	在宅に復帰した超高齢女性からみた回復期リハビリテーション病棟での作業療法の意味	95歳女性、左片麻痺、家族と同居	作業療法 8:1135-41	2004
6	大松慶子・山田孝	クライエント中心の評価を用いた経験～OSA ⅡとCOPM～	40代前半女性、美容師、脳出血	作業行動研究 9:42-50	2006
7	広野弘美・柴田克之	調理活動再獲得に向けて調理用自己評価シートの活用　シングルケースを通しての評価シートの有用性	右片麻痺中年女性	作業療法 26:166-172	2007
8	河津拓・野藤弘幸	作業機能障害を予防して活動的な生活を再構築できた事例―作業に関する自己評価・改訂版（OSA Ⅱ）を用いた作業療法経過から-	60代女性、主婦、脳出血	作業行動研究 11:89-98	2008
9	長谷川由美子・山田孝	作業療法により作業機能障害からの脱出を図ることができた一例	90代前半女性脳梗塞特養入所中	作業行動研究 13:189-194	2009
10	竹田里江・柳沢嘉奈・他	料理の再獲得や継続に影響を与える因子の検討―女性片麻痺事例における生活史の縦断的分析から―	62歳脳梗塞右片麻痺女性、58歳脳梗塞右片麻痺女性	作業療法 28:60-68	2009
11	浅野朝秋・石井良和	「もう一度旅に出たい」～人間作業モデルスクリーニングツールを用いた再評価により活動的な生活を再構築した事例	60代前半女性、左被殻出血、通所介護利用	作業行動研究 13:248-258	2010
12	牧山大輔・笹田哲・他	回復期作業療法によって夫婦役割を再獲得した事例～夫婦両者へのOSA Ⅱの活用～	50代後半女性夫息子娘4人家族	作業行動研究 14:184-192	2010
13	広野弘美・柴田克之・他	調理遂行能力の向上を目指し、包括的アプローチを行うための「調理アセスメント」の考案　役割獲得につないだ2事例への活用	片麻痺女性2例	作業療法 29:161-169	2010
14	田村浩介・原田伸吾・他	通所リハビリテーション1事例に対する役割再獲得のための作業療法介入～夫婦システムを考慮する必要性について～	70代前半右片麻痺失語	作業行動研究 14:283-290	2011
15	原田佳典・野藤弘幸・他	意味ある作業への従事により、作業参加が改善した脳血管障害発症後に抑うつ状態となった高齢女性	80代後半女性、独居、くも膜下出血	作業行動研究 16:210-218	2012
16	宗形智成・山田孝	脳卒中で高次脳機能障害を経験し自殺したいと語った男性クライアントに対する回復期リハビリテーション病棟での作業療法	60代前半男性右頭頂葉脳梗塞左片麻痺高次脳機能障害	作業行動研究 16:201-209	2012
17	野村庸子・山田孝	脳血管疾患の入院患者にとっての調理訓練の意味	男性5名女性10名35歳～88歳	作業行動研究 18:8-16	2014
18	武澤舞	脳卒中クライアントの「家事・役割」ニーズに応える訪問リハビリテーション	60代脳卒中女性訪問リハ	訪問リハ 4:189-194	2014
19	松岡剛・大松慶子・他	脳卒中急性期から事例の将来の役割を意識して作業を取る組むことができた一例	80代男性、開業医、脳梗塞	作業行動研究 19:25-32	2015
20	篠原和也・山田孝	介護老人保健施設に入所する中年期脳血管障害3事例に対する人間作業モデルに基づく作業療法	介護老人保健施設に入所中の中年期（50代）脳血管障害者3名	作業行動研究 20:94-103	2015
21	工藤梨紗・沼田士嗣・他	意味のある作業への支援が役割獲得をもたらし習慣の変化に至った一症例　養護老人ホーム入所者に対する外来作業療法のあり方	70代脳出血後遺症女性、入所中	作業療法 34:473-480	2015
22	大田暢・大松慶子・他	クライアントの語りと家族や他患者との関わりを通して新たな作業同一性を見出した事例	60代前半男性定年退職後脳梗塞	作業行動研究 20:104-113	2016
23	河本敦史・籬拓郎・他	脳血管障害者例（急性期）リアルオキュペーションの適用が作業を実現に導いた事例　馬術部のコーチ復帰を目指して	60代男性、髄膜腫	OTジャーナル50（8）:806-810	2016
24	椎野良隆	脳血管障害例（回復期）退院後の生活を見据えた介入により農作業という役割の再獲得ができた事例	50代男性、右被殻出血	OTジャーナル50（8）:811-815	2016

主な支援内容を以下に示した。

表２　事例が喪失した役割

喪失した役割	具体的な役割内容	役割を象徴する作業や事象
勤労者	建設業	車の運転
	医療者	
	農作業	草むしり
家庭維持者	主婦	料理
	夫	
	一人暮らし	入浴、料理
家族の一員	家族間での交流	皆に面倒ばかりかけている
	母親	娘に迷惑をかけない
趣味人	生活習慣の中での趣味の遂行	絵手紙、手工芸
養育者	母親	娘の面倒を見る
	父親	息子の結婚式に出る
友人	施設内の友人	
	仲間	外出
教師	馬術部のコーチ	馬術部の活動に関わる
自己役割	自分の事は自分で行う	自立への意志

1）．事例が喪失した役割

対象とした事例研究において、事例が喪失した役割と具体的な役割内容、その役割を象徴する作業とその事象について表２に示した。役割の評価については17の文献で「役割チェックリスト」が用いられていた。山田らは[15]、作業療法で多く用いられている「役割チェックリスト」（Oakley F）は過去・現在・将来の役割をチェックすることで、「習慣化」された役割、役割に関する「時間的展望」、「価値」を明らかにできるとしている。また、小林ら[3]は「自己役割」という概念を示しており、これは発症後の自立への意志のカテゴリであり、自分の事は自分で行うという役割として述べられている。

2）．OTが行った各役割に対する役割支援

事例が喪失した役割に対して、OTが行った各役割に対する支援の内容を表３に示した。なお表３中の番号は表１の文献を示す。

3）．OTが行った役割支援の実際例

表３の中で、特記すべき役割支援の具体例の要点を以下に示した。

①　役割の習慣化に繋げた例

事例は家族のために家事をできるだけ手伝いたいと思っていたが、妻は全て介助してしまっていた。事例

表３　事例への役割支援の内容

標的役割	役割支援の内容
勤労者	元美容師の技術を生かして他の利用者の入浴後の髪をドライヤーで乾かす役割を提案した（6）
	事例が価値を置く役割として聞き取る（16）
	役割を象徴する作業（草むしり・仕事仲間の相談役）を生活行為目標として共有し、作業療法で実施する（16）（24）
	個人史を構成する役割として事例理解に努める（19）
家庭維持者	支えてきた夫から「リハビリに専念しなさい」と役割変更を命じられているという本人の状況を理解した（2）
	夫からの役割期待に応える調理を取り入れ、技能向上を図り、能力の自己認識を高めた（8）
	調理活動に必要な能力についてアセスメントシートを使用して焦点化し料理活動再獲得に向けて訓練した（7）（13）
	調理の意味について面接を行い意識化させて実施した（7）（17）
	入院中の作業療法に夫を参加させ、料理を通じて本人と夫に関わることで本人の不安軽減を図った（12）
家族の一員	娘家族のニードに沿いながら、本人の退院後の日常生活内での家族関係を調整し患者家族の不安軽減を図った（1）
	ネット手芸を娘たちに贈ることを提案し、それが娘たちとの絆を再確認させることにつながった（5）
	介護タクシーに乗車できるようにし娘たちの希望していた外出ができる環境を作った（9）
	料理にまつわる出来事や行う理由を聞き取り再獲得や継続に影響する要因を検討した（10）
	家族の役に立ちたいというA氏の思いを妻に伝え、家事を習慣として行うよう働きかけた（14）
	使っていた生活物品を病室に用意するよう娘に依頼した（15）
	家族との関係を意識させる「孫にアンパンマンの絵を描く」事に取り組んだ（16）
	家事の中でも調理をしたいという要望を受けて動作・技能練習を行った（18）
趣味人	依存した生活を変えるため、絵葉書を行う人に戻ることが能力の自己認識を修正すると仮説を立てて進めた（4）
	元々バスツアーなど外出習慣を持っていた事例に対し、外出のための実際的な練習を実施し挑戦した（11）
	本人の意味ある作業である読経と編物を毎日行った（15）
	短歌を詠み作品をノートに記録する生活指導を実施した（19）
	作業の成功体験を基に、他の作業へも挑戦し、夫に報告することで妻としての役割を促し影響を与えた（21）
	事例と家族との繋がりを強調した会話、家族に発言や意欲の変化を伝えて橋渡しをした（22）

養育者	孫の保育園への送迎が生きがいとなり、家族にとって必要な人となるようにした（1）
	娘たちの健康を大事にしたいという価値を理解し、ポータブルトイレの自己選択を促した（5）
友人	病後の自分の利点や限界、価値を再認識でき、他の利用者との交流を促進するような作業参加を進めた（20）
教師	馬術部のコーチ復帰に向け部内で可能な仕事を見つけて役割を得るように関わった（23）
自己役割	「患者」でなく作業療法を「行いに来る人」として振る舞うように伝えた（2）
	「作業遂行歴面接」での面接から、機能障害があり生産的役割を担えない事に大きなストレスがあると捉えた（3）
	「できることは自分でする」事に価値を持つと評価をし、治療計画を立てた（5）
	OSA Ⅱより「家で家事をする人」「通所リハでボランティアをする人」となれるよう事例の心理を捉えて関わった（6）

の意志を妻に説明し、自宅で行う機会を作るように調整したところ、日課として習慣化し定着した。（田村ら、2011）[16]

② 役割の時間的展望への関わりの例

片麻痺女性に、料理を巡っての生活史を聞き取り、事例にとっての料理の意味づけの変化を理解することに努めた。（竹田ら、2009）[17]

③ 役割に対する価値の再認識を促した例

「何もできない自分になってしまった」という認識に対し、母親や友人の役割を再認識してもらい、再獲得するように働きかけたことで、作業有能性の改善が図られたことによって生活意欲の回復に繋がった。（長谷川ら、2009）[18]

④ 家族間の役割調整の例

事例の突然の入院で主婦を失った家族が混乱し、それによって本人が不安になった。作業療法の時間に夫にも参加してもらい、料理を通じて事例と夫に関わったことで家族全体の安定を図ることができ、解決方向に進んだ。（牧山ら、2010）[19]

Ⅳ．考　察

本研究では、脳血管障害者の役割支援に関連した研究と、脳血管障害者の役割支援を行った事例研究とに分けて文献レビューを行った。それぞれに対する考察を行う。

1．脳血管障害者の役割支援に関連した研究

脳血管障害者の担う役割は、森永[4]、笹田[5]、Mckennaら[13]の示すように、家族の一員、友人、家庭維持者程度と非常に乏しい状態であることが推察された。しかしながら、これらの文献は母集団がせいぜい75名とやや少なく、さらに調査が必要と思われた。

また、山根ら[7]、小林ら[3]、Satink[14]の質的研究では、脳血管障害者および介護者の主観的な適応状況を捉えるのに利用できると思われる指標が示されていた。これらは、臨床のOTが陥りやすい、偏りやすい、OT側からの一方的な見方を、本人や家族の視点で見るための有用な枠組みだと考えられる。

和才ら[5]、山根ら[8]の研究からは、脳血管障害者本人だけでなく家族も共に生活を営む当事者であると捉える視点を得ることができると考えられた。

鈴木ら[8]、西野ら[9]は男性脳血管障害者の問題を検討していたが、特に西野らは《満足できる人生の実践者となるプロセス》と《不満足な人生に陥っている人となるプロセス》を対比しており、両者の相違が経験的にも問題となりやすいことから、特に男性脳血管障害者の役割支援において示唆に富むと思われる。

緑川ら[12]は、役割数や役割行動時間が増すことが脳血管障害者に活動性、精神面ともに良い影響をもたらすことを明らかにしており、役割支援の意味を明確にしたものと考えられた。

2．脳血管障害が喪失した役割

事例研究から、脳血管障害者が喪失した役割は、生産的活動や日課を失い、家庭の中での立場や関係性を弱め、余暇等の楽しみを失い、人に教える生きがいを失い、自分の事は自分で行うという自己の有能性の低下に繋がるといった、人として生きていく上での様々な意味の喪失に繋がることがうかがわれた。役割が極めて少なくなると、抑うつ、ストレス、自殺等の心理社会的に悪い状態に陥りやすいとされる。そして自分は何者かという基盤が揺らぐ。また、能力障害によって病人などの周辺的な役割に追いやられると、もはや周囲から以前の役割を期待されなくなる[1]。この事がどれほどの生きる力を奪うかは、事例研究を読んでいて、想像に余りあると思われた。

3．作業療法で行うことのできる役割支援

対象とした事例研究では、事例が喪失したどの役割

に対しても支援が行われていた。特に勤労者、家庭維持者、家族の一員、趣味人の各役割に重点が置かれていると思われた。活用した理論的枠組みとして、人間作業モデルまたは生活行為向上マネジメントを用いて役割支援を組み立てている研究が多かった。表３の内容は、事例にとってのその役割の価値を知り、役割喪失によって生じている有能性の低下の状態を捉え、その上で、技能練習、機会の提供や生活環境づくり、生活習慣づくり、家族や他の入所者との交流の促進等を支援している。また、事例の心理状態の変化を捉えながら関わっている。こういった見きわめ方や支援プロセスの組み立て方が、特に若手のOTに切望されていると考えられた。

また、Bonsaksen Tらによると、役割に関連した作業療法の評価は、作業技能（occupational skill）、作業遂行（occupational performance）、作業参加（occupational participation）を含む。役割チェックリストで評価するのは主に作業遂行と作業参加についてであり、家庭維持者、友人、家族の一員、趣味人といった役割は作業遂行の要素が強いのに対し、学生、勤労者、ボランティア、宗教人、組織への参加者は作業参加の要素が強いとの調査結果であった。養育者には両方の要素がほぼ同比率であった。作業療法の最終的な目標は作業参加に至ることであり、作業参加は重要な作業を行うことで生活状況に関わることと述べられている[21]。この知見から、役割支援はただ遂行できるようにするだけではなく、対象者に内在化された状態になるよう促すこととされている。こうした包括的な支援であることが示唆される。

４．研究の限界と今後の課題

今回、脳血管障害者への役割支援という作業療法において非常に重要ながら方法論が見えにくい課題について、文献的研究を行った。筆者らの行った在宅脳卒中者への質問紙調査では、約５割が現在役割をもっていないと回答していた[20]。それに対し、社会参加を進めるために、今後在宅脳血管障害者の役割支援の重要性がより広く着目される必要がある。

英文文献については、検索数が乏しかったため、今後は著者として想定される国の研究者に示唆をもらい、検索の方法を工夫する必要があると思われる。また、公衆衛生学的に調査している研究がないかについても当たってみたい。

今回の結果で示した役割支援は、今後臨床で利用しやすいように、支援方法の理論化等が求められると考えられる。

【文献】

１）Kielhofner G編著（山田孝監訳）：人間作業モデル改訂第４版．協同医書出版社，p64-70，東京，2012.

２）小林幸治・小林法一・山田孝：脳卒中者は社会的・家庭内役割変化の程度によって主観的回復感の回復プロセスに違いがあるか．日本作業療法学会抄録集47回p344-Ld，2013.

３）小林幸治・小林法一・山田孝：脳卒中者は病前との連続性を回復する際に作業療法をどのように意味づけているか．作業療法31（3）：256-266，2012.

４）森永憲子：在宅脳卒中患者の生活状況と介助者の及ぼす影響．作業療法12：112-115，1993.

５）笹田哲：地域生活を送っている高齢障害者の作業役割に関する研究～役割と作業療法の視点から～．作業行動研究４（１）：18-22，1997.

６）和才慎二・田中正一：脳卒中患者と介護者のQOL―日常生活満足度による比較．作業療法15：156-164，1996.

７）山根伸吾・花岡秀明・清水一：脳血管障害者と生活を共にする家族の思いの縦断分析．作業療法27：533-542，2008.

８）鈴木ひろみ・山田孝・小林法一：ADLが自立している在宅脳卒中後遺症者の自信とその関連要因の検討．作業行動研究13：137-149，2009.

９）西野由希子・山田孝：地域生活する男性脳卒中障害高齢者の作業適応プロセスと人間関係の変容プロセス．2011：109-118，2011.

10）緑川学・山田孝：回復期リハビリテーション病棟を退院し田在宅脳卒中後遺症者の役割の実態と入院中の作業療法での役割支援の関係．作業行動研究16：24-32，20.

11）岩上さやか・杉原素子：患者が自身の生活に目を向けるきっかけ―回復期リハビリテーション病棟入院経験者のインタビュー―．日本保健科学学会誌17（3）：151-158，2014.

12）緑川学・山田孝：回復期リハビリテーション病棟を退院し田在宅脳卒中後遺症者の役割と活動・心理状態の関係．作業行動研究19：216-224，2016.

13）McKenna K, Barnett A, Prescott C, Murphy S: Caregiver burden, time spent caring and health status in the first 12 months following stroke. Brain Injury 19:963-974, 2005.

14）Satink T, Cup EH, LLott I, Prins J, de Swart BJ, Niihuis-van der Sanden MW: Patient's view on the impact of stroke on their roles and self: a thematic synthesis of qualitative studies. Arch Phys Med Rehabil 94:1171-1183, 2013.

15）山田孝・石井良和・石井隆志・竹原敦・篠川裕子：役割チェックリストによる時間的展望に関する１研究～若年と中年の比較～．日本作業行動研究会第３回抄録

集，1994.
16）田村浩介・原田伸吾・笹田哲・山田孝：通所リハビリテーション1事例に対する役割再獲得のための作業療法介入～夫婦システムを考慮する必要性について～．作業行動研究14：283-290，2011.
17）竹田里江・柳沢嘉奈・青山宏・仙石泰仁：料理の再獲得や継続に影響を与える因子の検討―女性片麻痺事例における生活史の縦断的分析から―．作業療法28：60-68，2009.
18）長谷川由美子・山田孝：作業療法により作業機能障害からの脱出を図ることができた一例．作業行動研究13：189-194，2009.
19）牧山大輔・笹田哲・山田孝：回復期作業療法によって夫婦役割を再獲得した事例～夫婦両者へのOSA Ⅱの活用～．作業行動研究14：184-192，2010.
20）小林幸治：心理社会面アセスメントシートver.1.0作成のための項目の検討　脳血管障害体験者への心理社会的援助メソッドの開発に向けて．日本作業療法学会抄録集49回p118，2015.
21）Bousaksen T, Meidert U: Does Role Checklist Measure Occupational Participation? The Open J of Occup Ther vol.3, Issue 3, 2015.

（2017年10月6日受付、2017年12月7日受理）

A literature study of occupational therapy for people with stroke who experienced significant changes in their social and domestic roles

Koji KOBAYASHI

【Abstract】

Background: People affected by stroke who live at home experience a change in their roles and tend to be anxious about the future. However, there are only a few reference materials on the role support in occupational therapy. This literature research deals with role support in occupational therapy for people with stroke whose social and domestic roles have significantly changed.

Method: Ichushi and MEDLINE were used for searching literature. The articles unrelated to the research question were excluded. The retrieved documents were divided into research studies on role support of people with stroke and case reports that considered the role support of people with stroke.

Result: Thirty-four studies were found in Ichushi, but none were found in MEDLINE. Two English articles were found through manual search. We gathered that support for people with stroke remained with family members, a friend, or household help. This qualitative study provided hints which are useful in understanding subjective situations.

Discussion: This study provides suggestions for occupational therapists who have difficulty associated with understanding role support. Future studies focusing more on role support are needed.

Keywords : Occupational Therapy, Stroke Clients, Role support, Literature study

Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Sciences, Mejiro University